見捨てた石炭の報いおそれる

住友赤平労組（北海道赤平市字赤平五三三番地）の新聞〝赤平ろうほう〟（一月一日発行）は、わが国の石炭情勢について注目すべき記事を掲げた。岩井勇さんの手記で、三池としても考えて見たく、重大な政治情勢のなか、あえてその全文を紹介する。

今やるべきことは？

海外炭依存のエネルギー政策

現状では必ずくる暗黒

岩井さんの手記

もと六二四鉱

「石炭見直し」――この言葉を聞いてからかなりの月日が流れていった。しかし、これはかけ声だけで、われわれ石炭産業に働く者にとってはなんの意味もない言葉となっている。国内炭の生産量を考えてみれば良く解ると思う。

炭鉱が最高に生産を上げていた一九六一年（昭和三十六年）は、産量が五千五百四十一万トン＝年産額。以下同じ。それにくらべ海外炭は、千二百三万トンといわれていた。

この年をピークに国内炭は減り続け、逆に海外炭の輸入は増えてきたのである。

この年のエネルギー構成比は、石炭と石油が同じである。それぞれ三九・九％となっている。

それ以前のわが国の炭鉱数を調べてみると、一九五九年（昭和三十四年）には六百二十四炭鉱もあり、炭鉱労働者は二十五万六千四百人だった。

滴った血と汗

ご存知の、黒い羽根運動はこの年の九月にはじまった。炭鉱離職者救済キャンペーンである。

翌年――一九六〇年（昭和三十五年）は安保闘争の年であり、さらには三井三池の大闘争の年でもあった。

これから三年後の一九六三年（昭和三十八年）には、炭鉱数は三百六炭鉱に減り、労働者はピーク時の半分以下の十二万二千八百人となる。しかし、生産量は五千百九万トンとさして減らず、スクラップ・アンド・ビルドの効果が現われ、労働者の血と汗が生産される石炭のうえに滴り落ちていたのである。百万人当たりの災害率は、一九五九年（昭和三十四年）の六四〇を超えて九八〇となり、最悪の状態となった。

現在では、炭鉱はわずかに二十六炭鉱といわれ、労働者も二万百人しかいない。

増える海外炭

それでは、国内炭と海外炭の価格をみると――

一般炭は、国内炭一万五千五百円、海外炭七千五百円。

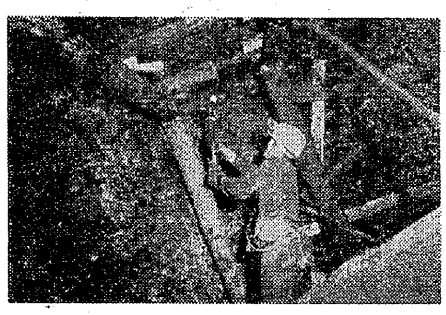
原料炭は、国内炭一万九千八百円、海外炭一万千五百円――となり、安い石炭を海外からどんどん輸入している。一九七七年（昭和五十二年）の国内炭の生産量は千八百五十七万トン（計画では二千万トンとなっているが）。海外炭の輸入は五千八百二十八万トンとはるかに多く、いかに騒いだところでおよぶべくもない。

日本のエネルギーの中で、国内炭のしめる率は一四・八％で、イギリスは四〇％、ドイツは三〇％である。一九七六年（昭和五十一年）のエネルギーの海外依存度は日本が九〇・八％と異状に高く、フランスは八〇・六％、西ドイツは五四・五％、イギリスは三二・九％、アメリカは一七・五％となっている。

ゆく先は暗黒

日本は、これからのエネルギー問題をどう処理していくのか。

新聞紙上をにぎわしているイラン問題にしてしかり、石炭を見捨てた報いが現われつつある。安いからといって海外炭を輸入し、また石油に頼るエネルギー政策は近い将来、日本を暗黒の世界におとし入れることだろう。



赤平炭鉱の坑内労働

一私企業である石炭会社の力では、もう限界にきている。石炭を一つのエネルギーと考えず、日本のエネルギーとして考えるとき、損得抜きで守らねばならないはずである。

やるべきは何

すでにメジャー（多国籍企業）はいい鉱区を買いしめている。そのため、中東の石油権益の一部を手放しているとさえいわれているのである。

われわれのやるべきことは何か。じっくり考え、きたるべき参議院議員選挙には、どんなことをしてでもわれわれの代表を国政の場におくらねばならない。

それが今われわれに与えられた最重要な闘いなのだ。

×

筆者の岩井さんについては、新聞〝赤平ろうほう〟から「常任保安委員」と知られるほかはわかりませんが、こうして活用させていただいたことをお許しいただきたく存じます。大変ありがとうございました。

――編集部

被災後八ヵ月で死去

今年四人目の犠牲

依然悪い坑内保安

四山鉱（小林昭二郎鉱長）で発生した思わぬ坑内事故のため重傷を負い、昨年の十月以来熊大附属病院に入院していた梅田美知夫さん（四十一歳。三井建設の仕繰員。荒尾市宮内社宅七十六棟）は、治療の効なく、五月十四日、入院先の同病院でついに永眠した。負傷後半年以上もたってからの死だっただけに、ことのほか惜しまれてならない。

事故は、昨年の十月二十五日午後二時十五分頃、四山鉱の西三十五卸六百七十メートル連延（坑口から七千八百メートルほどもはいったあたり）で起きた。

切羽詰に向かって走っていたバッテリー電車のホースが、疎水溝穿孔時の残ロッドにひっかかり、ストップバルブと二インチエルボの取り付け口がはずれてはね、折悪しく疎水溝発破後の点検のため付近にいた梅田さんの右後頭部に当たり、負傷したものと推定されている。（以上は四山鉱災害速報から）

負傷の状態は、右資料が「後頭部頭蓋骨骨折、脳挫創」と伝えているところからも察しがつくように、重傷としてもひどく、即刻熊大病院へ送られたものだった。その際、三池労組は会社に対して強く抗議した。

なお梅田さんは、昨年の二月一日から三井建設に入り、仕繰員として四山鉱に働くようになった人で、その後わずか八カ月でこの災害にあったもの。災害による犠牲は、今年だけで梅田さんで四人となり、三池炭鉱の坑内保安の状態の劣悪さがさらけ出されている。

焼酎も飲めん 炭鉱の暮らし

春闘最中職場の話

炭労の春闘は、今年も低額回答で終ったが、これはまだ春闘最中の、四山鉱の職場での話。

Aさん　あんた、小遣いはいくらナ？

Bさん　おかしゅうじていわれんバッテン、月一万二千円たい。手取りが十五万円。小遣いば引くと、十三万八千円しか残らん。

Aさん　あんたゲは四人家族やろ。食われんやろ？

Bさん　食われんばってん一万二千円は要るもんナ。飲みたい思いはあるが、焼酎も飲めん。

Aさん　電気代、ガス代、ガソリン代と次つぎイ上がる。支出も増える。

Bさん　たとえ要求の全額取っても足らんナ。

Aさん　資本家どもは遊び放題だろうが……。（以下略）

（四山指導部職場五分会新聞〝きずな〟＝六四号から）

かわら版

国鉄運賃値上げ

汽車、運賃、アップでソッポ、ソッポ、ソッポッポ。

――私鉄バス利用者

――マイカー族

サケマス交渉協力金五億円で妥結

〜円や取っと、円や取っと

――ソ連

〜アー、どっこいしょ、どっこいしょ。

――日本

KDD疑惑

役人大挙して不善をなす。

――警視庁

浜田幸一氏議員辞職

ハマコウの非難はつきるとも、世に贈収賄のバクチはつきまじ。

――石川五右衛門

×

以上は合化労連機関紙〝合成化労〟（五月一日発行）から紹介しました。三化労組の木鼓子さん（ペンネーム）の作品とか。ひとつ三池の職場から、傑作をお寄せください。

――編集部

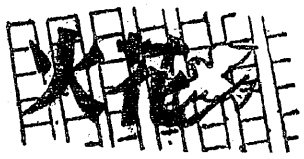
有難う、大場さん

柳田さんの許へ嬉しい訪れ

話はことしの一月下旬にさかのぼりますが、この頃柳田秀吉さん（組合員。新港町三川鉱社宅）からふともたらされたことです。

柳田さんのもとへ、久しぶりに山形県最上郡真室川町大字新町二二〇―三に住む大場みき子さんから、懐かしい便りと思いがけない小包が届きました。

大場みき子さんといえば、本紙でも幾たびか紹介しましたが、昭和四十六年の〝三池にまなぶ集会〟に参加してきた人で、そのとき柳田さん宅に寄偶しました。



以来、そのとき結ばれた連帯のきずなを紐として、双方ずっと交流を積み重ねてきたのです。

大場さんは当時十九歳で、某病院に看護婦として働く明るい娘さんだったのです。

ところがその後、軽い病気になり、別の病院で治療を受けたところ、一医師が、強引とも思われる態度で行った注射のため右半身不髄にされ、今もってその苦しみに泣いている人です。

三池の闘いに学び、彼女はその後損害賠償請求訴訟を起こし、和解の形で相手病院に責任をとらせることができ、その後は自由の効く左手を訓練しながら、ひと通りのことができるまでにいたりました。手紙はすべて、左手できれいに書いてあります。

そんな大場さんからの小包。果たして何だろうと開けてみると、柳田さんへのハオリの紐と奥さんへの帯じめでした。

「右手は全然動きませんが、昨年七月から、組み紐を習っています。品は使っていただけたらさいわいですが、練習中なので……。ここまでやってこられたのも、三池の皆さんのおかげです」

手紙に、このように書かれていました。馴れぬ左手で……と思うと、柳田さんならずとも何とお礼をいったらよいか。

とりあえずことのしだいを紹介して、感謝の意を表したいのです。大場さん、がんばって。

大場さんから柳田さんへの贈りものが上の写真にある、ハオリの紐と帯じめです。